
兄弟物語(3) 料理編

青春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄弟物語（3） 料理編

【NZコード】

N1244T

【作者名】

青春

【あらすじ】

中学生のショウには大学生の兄、高校生の姉、そして小学生の弟がいる。 料理とは戦いなんだ。多分。

日曜日。学校もなくて一週間におけるオアシスといつても過言ではない日。

俺こと健全でじぐく普通な中学生ショウは、貴重な休日を自室でだらだらと過ごしていた。

畳に寝つ転がって友人に借りたマンガを俺は読みふける。

「ショウ。どうせ部屋にいるんでしょう、ちょっと来て」

自室の薄い壁や襖を通してそんな女の声が聞こえた。

もちろんこの家に女は一人だけなので、俺は完全シカトを決め込んでマンガのページを捲る。できる限りあの女には関わりたくない。

あの女といえば、あの女。俺の姉のルリだ。

女子高校生という身分だが、性格は自分勝手かつ暴力的という、姉としても女としても人としてもできるなら関わりたくない部類のヤツだ。

だが同じ屋根の下に暮らす身としては避けられない相手であり、俺は毎日のようにルリに虐げられているとてもとても可哀そうな少年なのである。

姉の呼びかけを無視して、漫画の主人公がビルからジャンプしてさでじうする！？ というシーンを目にした所で部屋に木が割れるような音が響く。

どうやら襖が倒れてきたらしい……と倒れた襖の隣で固まっていた俺は、少々長い時間をかけて状況を理解する。戸口にはルリが立っていた。

「姉貴！ 僕に襖が当たつたらどうするんだよー。 つてか扉壊すんじゃねえ！」

そこまで勢いよく言つたのはいいが、部屋に足を踏み出す女の顔を見て俺はこの時のことを後悔した。

「シユウ？ お姉さまが呼んだんだから即刻、迅速に、なにもかも捨てて、ね？ 返事するのが兄弟愛つてものじやいかしら？」

ルリは兄弟愛を誤解してやがるッ。

でもそんなことは口に出して言えなかつた。

なぜなら姉貴の顔はまさに般若だつたからだ。般若相手に一般ピープルが何を言える？ いやいや無理だろ。

……制裁を受けながら、やつぱり俺はこの暴力姉貴に人生をどん底に突き落とされているのではないか と思う、今日この頃だった。

姉貴にボコボコにされた俺が逃げるようの一階に下りると、居間で弟のタケルがせんべいを食べながら、昼前のニュースなのかバラエティ番組なのかよく判らないテレビを見ていた。

小学生のタケルは末っ子だが、ルリのように暴力は振るわないし我儘も言わない。学校の成績も良いらしいし、手を焼かせることな

どほんどの歳の割にしつかりした弟なのだ。

だが冷めたような目でブラウン管の中のバラエティの出演者たちを見ている姿は、兄として将来がどことなく心配になつたりする。あ、うちでは地上『デジタル放送なんぞみられない。』画面の隅に『アナログ』の文字がいまだに浮かんでるぜ。

「すうい音だつたね、シユウ兄」

俺に気がついたらしいタケルは、特に心配する様子も見せず淡々とそう言った。むしろまたかと言わんばかりに呆れてるようにも見える。……か、悲しい。

「あれ。兄貴は？ 今日はバイトないつて言つてたけど」

我が家は四人兄弟である。その長男である大学生のユージは、見た目はそこそこ良いと言われているが中身はウザい。なので兄弟たち（主に俺とルリだが）から少々煙たがられている男である。しかしユージはバイトがない休日を、大抵家事に勤しんで家の母親代わりを担う。……それに関しては感謝してない事もないんだぜ。

家のどこにも兄貴の姿がないことに俺は首を傾げた。

「ユージ兄は友達がこの辺に遊びに來てるらしくて、出て行つたよ」「……兄貴もたまにはゆっくりしたいだろ。俺が昼をつくりますか」

一応家事は兄弟内で分担しているが、ほとんどユージが家を仕切つていても良い。料理のひとつやふたつ代つてやらねば。だが俺の言葉にタケルは不安げな表情になった。

「大丈夫なの？ シュウ兄つて、料理できたつけ？」

「焼くくらいなら俺だつてできる。家庭科でもハンバーグ作ったことがあるし、なんとかなるつて」

ただしその時は同じ班の女子が9割くらい料理してたけどな。俺ともう一人の男子は邪魔者扱いされて洗い物しかしてねーけど！

「インスタントラーメンでいいんじゃない？」

「少しくらい俺の腕に期待してくれよ……」

タケルが冷静に判断して簡単料理を進すすめてくれるが、そう言われると逆にインスタントに頼りたくなるのが漢おとこつてもんだ。

「大丈夫だ。お前は座して待て！」

「非常に不安なんだけど……」

「ああもう、文句は食つた後言え！」

腕まくりをした俺は意氣込んで台所に行く。タケルも心配なのか、後ろからついて来た。

「さて、と。初めは形からだな。おいタケル、エプロンつてビニールしまつてあつたつけ？」

「え？ そんなことも知らないの？ 大丈夫？」

エプロンぐらいでそこまで心配されるのは正直心外なんだが……まあいい、ここは兄として何も言わないでおこう。

呆れながらもタケルが床板を軋ませながら隣の部屋 親父の部屋に走つて行つた。

あまり家に帰らない親父の部屋は、半分が家族の誰かの物か判別しにくいものの物置状態だったのだ。例えば兄弟が共同で使ってい

る物。エプロンは勿論、脱衣所に置ききれなかつたタオルや客用の布団などなどだ。

しかしそこから戻つてきたタケルに、俺はストップをかけた。

「待て待て待てええええ！！ それはいい！ それは持つてこなくて良いッ！！」

「どうして？」

不思議そうに首を傾げるタケル。そこには邪氣はなさそつだ。
しかし！ しかしだな！

タケルの手にしているエプロンがピンクなのは、俺の目間違い
じゃないだろ？！？

「タケル君。それは兄貴のエプロンじゃないのか？」

そう、兄貴がいつも身に着けている、大きなチューリップのポケ
ットが付いたフリフリエプロンだ。それを俺にも身につけると……？

「別にヨージ兄のじゃないよ。だってお父さんの部屋にあるのは皆
の物でしょ？」

「いや、まあそうだが」

「なら別に使つても大丈夫でしょ。はい、どうぞ」

俺の手を掴んでわざわざエプロンを手渡すタケルが悪魔に見えた
んですが。血は争えないのか。タケルにもあの女と同じ血が混じつ
ているということか……いや、俺もそうなんだけどね。
しかも悪意がないだけ拒否も抵抗もできねえええーー！

そういうわけで、俺はしみだらけの天井を見上げながら涙をこら
えた。

「あ、ありがとな」

「せめて食べられる昼食を作つてよな」

そして俺は……「アフローなHプロンを……身に着けぬ……。

クソ……学校の奴らに絶対みせられねえ……ツ……

「シユウ兄なにつくるの?..」

涙をのんで昼食作りのため冷蔵庫を漁り始めた俺に、タケルが訊ねる。

「ふつふつふ……給食でも人気の庶民の味方、焼きそばだッ!!
「それならさすがのシユウ兄でも食べられる物になりそうだね」
「アハ!いつ事言ひナにはやうねーぞ!..?」

傷ついた俺がそつまつと、タケルは冷静に俺をなだめやがる。

「まあまあ落ちつこてよ。で、材料は足つるの?..」

兄ちゃんにもプライドつてもんがあるんだぜ!..?

「やうだな。麺はあるけど具は……お、キャベツに人参、玉葱……結構あるじゃん」

「紅しょうがは?..」

「あるある。前に使つた余りか? 賞味期限大丈夫かこれ。まあ死にはしないか」

「えー」

「あとはしげたけとか、魚とかもいれてみるか! たしかアジが残

つてたよな

「ええー」

「やべ、肉忘れてたつけ。つて牛肉しかねえしつ！ 皿そつだしこれでいつか」

「シユウ兄」

「チーズいれてみるか！ 粉のやつ。あとバター！？ それからハムにトマトとか……なんか洋風焼きそば的なもんになるかも！」

「シユウ兄つてば」

「きゅうりとかほうれん草もいれてみるかなー」

「シユウ兄ッ！」

珍しくタケルが大声を出す。

「…………シユウ兄、わざと言つてるんだよね？」

「バレたか。…………いッ！？」

俺はその場にうずくまる。

タケルが俺の美脚をけどばしやがつた。しかも弁慶の泣き所をクリティカルヒットだ。

ふざけんな。ちょっと弟からかつただけじやないか」「めんなさい。

「りょ…………料理得意じゃないんだし、俺だつてガンガン余計な材料足して自滅するようなチャレンジはさすがにしないぜ…………」

「シユウ兄なら調子乗つて食べられない創作料理作つても違和感ないけどね」

「でもいま俺が言つた材料ならギリギリ食えそつ…………」「もういいから普通に作つてよ」

ひしゃつと厳しい口調で言われ、俺は素直に返事する他なかつた。

そして俺は…… 困苦八苦、右往左往悪戦苦闘しながら炎と戦い材料を炒め麺をぶちこみ 焼きそばを完成させた。

しかし完成…… どうの？

「…………これは酷いね」

タケルその言葉が俺の料理の成果をなじる。

フライパンの中はなぜか半分黒コゲ。干からびて硬そうな麺はとてもじやないが美味しそうには見えない。

「…………人間食おうとすればなんでも食えるよな

「それをシユウ兄が言つの？」

ジトーと横目で見られる。

シユウガナイジャナイカツ！

「もう焼きそばじやなくて、焼きすぎそばだよね」

「つるさこつるさーーー！ 食えばけつこつ美味しいかもしれないだろー？」

「えー……」

タケルは箸を取り出し麺を口に入れた。一瞬でタケルの表情が崩れる。

「…………うん、まあ……焦げた味がするよね」

実はものすごく美味かつた！ なんてこともなく、普通にまづい

「うーん。

「ですよね。しょうがなーからインスタントラーメンにするか…

…

焼きそばの皿を下げようとするとタケルがそれを止めた。

「いいよ。僕これ食べる」

「いやでもまずこって」

そこにルリが帰ってきた。手にコンビニの袋を持っていたので菓子でも買いに行つてたらしい。……といふか、姉貴が俺の部屋に来たのは俺をコンビニに行かせるためだったのか……？

台所の戸口に立つルリの後ろには、ゴージもいた。

「ただいまー。お皿おしゃくなつて」めぐね

長男ゴージはネギが飛び出た愛用の買い物袋を食卓に乗せた。

「そうだー。ただいまのハグしなないとー」

「は？」

なんとこきなり兄貴が抱きついてきやがつたッ！　きめえ！

「なにしてんのよッ」

ルリは俺に抱きつくゴージの頭をはたく。ゴージは俺を放すと今度はそのルリに抱きついた。

「兄貴すげえ。姉貴の攻撃を受けといてダメージ〇だと……？」「そこは感心する所なんだ」

だが「ルリちゃんってば焼きもち焼かなくたつていいのにてー」と姉貴に抱きつく兄貴はやつぱりきめえ……。せりにタケルにも抱きつきやがった。

まったく兄貴の抱きつきグセはどうにかならないものが、と思っていると、コージの抱擁にげんなりした様子のルリが卓上の物体に気がついた。

「あら？ なんか作つたっぽいわね」「シユウ兄が焼きそばつくったんだよ」

タケルが言うとルリもコージも驚いた。俺を凝視すると食卓の上の皿の中をまじまじとのぞく。

「シユウがお皿作つたのか？」

コージの疑問に俺は額を搔ぐ。

「まあな。でも失敗しちまつてさ」「ホントだ。黒いし硬そつ

マイ箸をタケルから受け取つたルリが焼きそばを食べる。

「ソースの味はするけど苦こしまずいわ

「なら食つなよ」

「優しい優しいお姉さまは弟の涙ぐましい努力を無下にしたりしないでよ！」

「てめえ顔笑つてるじゃねーかツ」

憤慨しつつ実はストレートな言い方に俺はへこんだ。
これ以上失敗作を笑われる前にやつせとげつけよう……と思つた
んだが、コーディが俺の手からせつと皿を奪つた。

「待て待て。俺はまだ食べてないよ」

そしてコーディまで焼きスギそばを味見する。

「…………。悪いシユウ。俺がちゃんとシユウに料理を教えてあげ
てればこんな悲惨なことにならなかつたのに……」

「うつせえ！」

コーディが目からダダーッと涙を流す。

文句言われるよりマジ泣して同情されるほつが嫌だわッ！－！

「シユウはコーディに弟子入りでもした方がいいんぢゃないの？」
「うんうん、今からでも遅くないぞ。怖がらなくていいからな、き
つと美味しい焼きそば作れるからなっ」

そんなことを言ひながらルリとコーディはパクパクと焼きそばを口
に放り込む。

「だからまずいなら食うなつての！ コーディだつて帰つて來たんだ
し、ちゃんとしたの食えはいいだろツ」

しかし俺の叫びに三人は、

「食べられないことないし僕はこれでいいよ

「俺もシユウが作ってくれた焼きそばで十分だ」「材料もつたいないでしょ。次は美味しい焼きそば作ってよ、シユウ」

三人は言いながら、俺が作った焼きそばを食べるのを止める様子もない。

なんなのこいつら。俺へのいやがらせか？文句が言いたいから無理して食つてんのか？

ユージ、ルリ、タケルはまずいまずいと言ひながら笑つている。

「……」

俺は深い深いため息をついた。

「おまえいらさあ」

焼きそばをそもそもそと食つてる三人が立つたままの俺を見上げた。

「……俺の分もあるんだからな」

俺も椅子に座る。

ユージがてきぱきと俺の分をよそってくれた。干からびた麺を口に入れる。

「まあつー」

思わず自分で言つちまつとタケルもルリもユージも笑つた。

今度は絶対うまいと言わせてやるからな。
そう思いながら俺はぼりぼりと麺をかみ碎いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1244t/>

兄弟物語(3) 料理編

2011年5月8日20時46分発行